

野の和洋ミツバチ —相模原市付近の近況—

岡田 一次

平成5年(1993)4月末、私が急に転居した相模原市は神奈川県北部地域、東京都八王子の南に位置する。古くから野生のニホンミツバチ *Apis cerana japonica* Rad. (日本蜂) の生息する地である。私は昭和27年(1952)頃からの方面へ時々出かけ、柿沢亮氏のご好意で日本蜂の1群を玉川大学構内に飼育したこともあった。浅田(1993)の報告によると、本種の野生群は県内の方々で現在も観察されている。

私は転居後、野の和洋ミツバチの実況調査を始めている。ところが予想外の新事実に出会ったので、その概要を短報したい。

1. ニホンミツバチ (日本蜂)

ニホンミツバチの働き蜂の体はセイヨウミツバチ *Apis mellifera* L. (西洋蜂) よりも少し小さく(85mg)、体は黒褐色、腹部の灰白色のバンドは目立つ。夏期には体色は明るくなるが、判別は容易で、見誤ることはない(図1)。

ニホンミツバチの多数飛来

1年目(1993)

私が入居したマンション(7階建)は市街地にあるが、付近の人家の庭先や畑に咲く花上で両種の姿はよく目にとまる。養蜂家は少数あるようであるが、近くには巣箱を見かけない。

平成5年5月4日、玉川大学の佐々木正己教授から花の咲いたキンリョウヘン(東洋ラン) *Cymbidium pumilum* Rolfe の1鉢を借りて4階のベランダに置き、以前日本蜂を飼っていた古巣箱2個を横に並べた。1箱の中には、貯蜜1/3ほどの古巣板を加え、蜂の飛来を待った。

翌々日の5月6日午後、ベランダの花の近くに日本蜂の姿を見かけ、注意していると、飛来数は急に多くなり、蜂さわぎの様相が始まっ

た。福田(1988)、佐々木(1992)の報告にあるように、蜂はランの花にとまるものもあり、巣箱には蜂がどんどん入って行く。蜂の行動は次第に「大さわぎ」となり、左右両隣りの家の窓にも多数が飛来している。このまま放置すれば1群の転入は確実と推察された。この時、事態処理について色々の考えが湧き起った。「蜂群は捕えないで、自然状態を変えない方がよい、とか、団地での蜂の事故は絶対に避けなければならない」などの事柄であった。苦慮の末、今回はいったんラン鉢と巣箱の両方を全部、室内へ移し、様子を見ることにした。蜂の飛来さわぎは比較的短時間でおさまった。

私はこの時、学術上、重要な事柄に気づいた。(a)日本蜂はランに誘引されたのか、それとも(b)

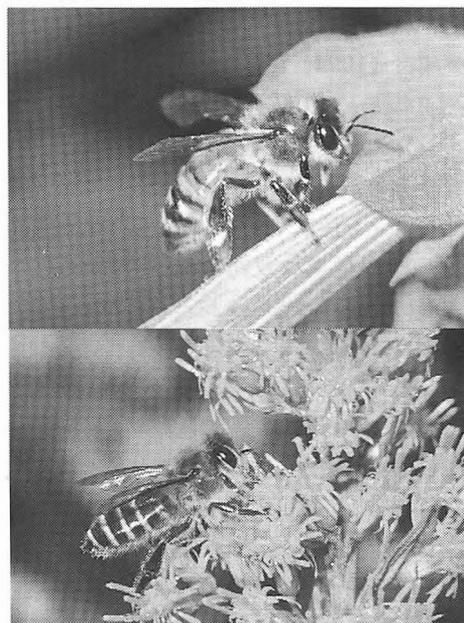


図1 訪花

上: セイヨウミツバチ, 花はサルビア

下: ニホンミツバチ, 花はセイタカアワダチソウ

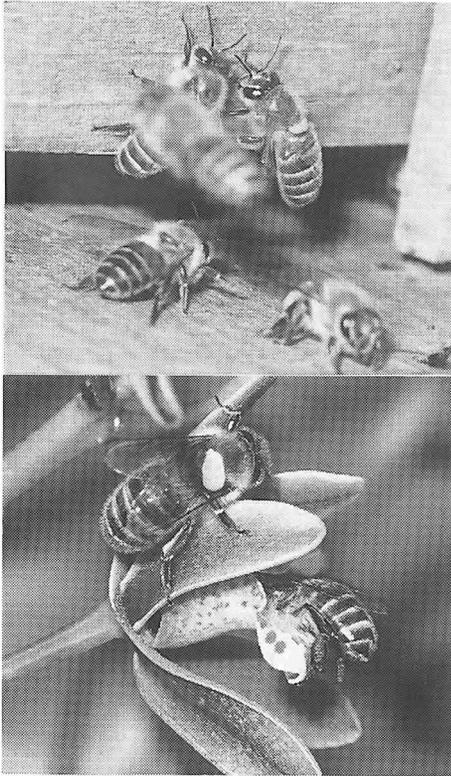


図2 ニホンミツバチ誘引実験

上: 1993, 下: 1994, 花はキンリョウヘン

貯蜜巣板入りの巣箱の方が主体か。蜂の飛来策に力を入れすぎ、2つの誘引源を同じ場所に用意していたのであった。色々の実験の反省をし、今回はここまでで打ち切った。

2年目(1994)

平成6年5月19日、懸案の日本蜂のキンリョウヘンへの訪花誘引性を再確認するため、ベランダから巣箱を一切取り除き、再び佐々木教授栽培のランを使って2年目の実験を行った。

今回の蜂の飛来は翌朝の10時頃から始まり、働き蜂の訪花と送粉を見ることが出来た。中胸背上に淡黄色の大きな花粉塊をつける個体もいた(図2)。蜂の動きは、蜜源花の時と違って非常に激しく、行動解析は困難であった。

翌午前中にも類似現象は小規模に繰り返えされた。今回の2回の誘引実験での多言は控えたいが、日本蜂はキンリョウヘンの花にはよく飛来する。西洋蜂の姿は一度も見られなかった。

私はニホンミツバチの自然生息状況の変化を望まない観点から、「誘引剤による野生群の捕獲には賛成できない」という立場を確認した。

2. 訪花習性の相違点

私は上記平成5年と翌年の2年間、実用的な見解も加味して、この難題について当地で野外観察を実行してみた(図1)。

(a) 日本蜂がよく飛来する植物: 菜の花, タンポポ, アラセイトウ, ネギ, ノブドウ, ツタ, ヤブガラシ, セイタカアワダチソウ

(b) 西洋蜂の場合(明るい場所での訪花活動が多い): 菜の花, タンポポ, 白クローバ, ネギ, ツツジ, アベリア, ヒマワリ, ゼニアオイ, ネズミモチ, ヤブガラシ, キク, コスモスなど。

予想外であったのは田名の狭い空地にアラセイトウの花が咲いており、日本蜂が飛来していたことである。わずかな花への訪花を見ながら、紫の花一面の上をミツバチが飛び交う玉川学園の丘を瞬間思い出した。

蜜源植物の増殖に思いを廻す時、岡田(1991)の指摘したニセアカシア, クリ, ビワのような身近な有用種を積極的に植えたいものである。

今回の短期間の生態観察では、花を訪れる両種間に敵対行動は見当らず、極端な西洋蜂群の導入が無い限り、土着日本蜂は安泰ではなからうか。

(〒229 相模原市田名4112-1 ダイアパレス402)

引用文献

- 浅田真一. 1993. ミツバチ科学14(4): 166-169.
 福田道弘. 1988. ミツバチ科学9(3): 127-130.
 岡田一次. 1990. ニホンミツバチ誌. pp. 81.
 岡田一次. 1991. ミツバチ科学12(2): 13-26.
 佐々木正己. 1992. ミツバチ科学13(4): 167-172.

OKADA, ICHJI. Recent status of native Japanese and introduced European honeybees in Sagami-hara. *Honeybee Science* (1995) 16(2): 67-68. Dia Palace 402, 4112-1, Tana, Sagami-hara-shi, Kanagawa Pref., 299 Japan

There was a species-specific preference in the nectar and/or pollen source plants foraged between native *Apis cerana japonica* and introduced *A. mellifera*. Attractivity by the orchid, *Cymbidium pumilum* to workers of feral *A. c. japonica* colonies was confirmed by placing the potted orchid flower at balcony of my apartment of fourth floor in 1993 and 1994.